

張炎『詞源』卷上譯注稿(二)

解題

松尾肇子

一、『詞源』卷上

詞とは中唐の頃から盛んになった歌辭文芸で、宋代を頂点とする。しかし、元代には散曲が流行して詞は衰退に向かい、明代には旋律を喪失し、清代以降は詩よりも高雅な韻文の一樣式として盛んに作られた。『詞源』は、元初に著された詞論書である。著者の張炎は南宋の淳祐八年(一二四八)に生まれ元の延祐七年(一三二〇頃)に没したと推定されており、詞の爛熟期に活躍したと言つてよい。

『詞源』は二巻で構成されている。巻上は詞楽理論を、巻下は文芸理論を展開する。当時の詞論には、文辞面のみ限定しての批評と音楽も含む総合的批評とのふたつの立場があった。『詞源』は後者、すなわち詞を歌辭・音楽が一体となった文芸としてとらえる。しかしその読まれかたはどうだったのか。巻下は、六朝時代以来の歴史を有する詩論を取り込みつつ、著述から間もなく曲論にも影響を与え、現在に到るまで、完成度の高い文芸批評の書物として高い評価を得てい

る。これに対して巻上は、曲律や楽譜についての音楽理論を対象としたため、音楽の専門家と一部の好事家の注意を引くもの、おそらく当時から一般に読まれることは少なかったと推測される。たとえば張炎の直弟子である陸輔之は、『詞旨』を著して張炎の詞学を称揚した。しかし、対句や警句の集句に多くが割かれているように、もっぱら作詞の指南書であつて音楽論が説かれることはなかった。これは詞楽理論の難解さに加えて、当時すでに詞が歌われなくなりつつあつたという理由によるのだろう。とすれば、楽曲が失われた明代以降にあつて、作詞の実際の役に立たない巻上が閑却されたのは当然である。現在まで、巻上は音楽史研究の資料としては欠くことのできない重要な書物であるとの評価をうけながらも、一部専門家に読まれるにとどまっている。ただし、張炎は巻上を著すにあたって視覚的に理解を助ける工夫をしている。すなわち巻上を構成する十四条のうち、最初の「五音相生」と最後の「謳曲旨要」は文章のみだが、その他は図や譜号と文章解説とを組み合わせているのである。もともとこれらの図として理解は容易ではない。本文では図譜の意図の解説にも字数を費

やすことになるであろう。

次に順を追って巻上の十四条の概略を記す。各条の詳細は本文をお読みいただきたい。

「五音相生」から「陽律陰呂合声図」「律呂隔八相生図」「律呂隔八相生」「律生八十四調」までの五条は、『礼記』以来の歴史を有する楽理の理念解説である。五音十二律から説き起こし、隔八相生（三分損益法）による音程の決定、さらにそれを組み合わせで成立する八十四の調を示す。「古今譜字」では、詞の音楽に使われる、より実際のな音程名（音符）を、工尺譜を用いて十二律と対照させ、「四宮清声」は四つの高音（清声）を取り出し、応指譜を添えて解説する。「五音宮調配属図」「十二律呂」は、宮調の十二か月への配当表、及び雅俗二系統の呼称とそれに対応する譜字で、これまでのまとめであると同時に、詞の音楽に用いられる調名とそれに対応する音符の実用的な総まとめとなっている。「管色応指字譜」は、管楽器の指使いの字譜、すなわち張炎当時の「今」に通用する記譜そのものであり、「宮調応指字譜」は「七宮」と「十二調」とに分けて譜字を示す。「律呂四犯」では転調の規則を示した後に南宋・姜夔の文章の一部が引用され、「結声正訛」は転調の運用法について述べる。最後の「謳曲旨要」は、七言三十二句で構成された口号で、様々な注意事項を詠みこんでいる。

二、張炎と音楽理論研究

宋代には都市が発展し、市民のための各種の俗楽が盛んであった。

その一方で北宋末の大晟府のように音楽署による雅楽や燕楽の整備演奏も行われた。中国において楽律制定は王朝の正統性を示すものであったから音楽の専著は古くからあるが、宋代には、北宋・陳暘『樂書』や南宋・蔡元定『律呂新書』のように詳細、かつ現在まで伝存する著述が登場する。また一般の人々の関心も高く、北宋・趙令時『侯鯖録』や南宋・孟元老『東京夢華録』など、宋代筆記には音楽に関する記述が多数含まれ、『碧鷄漫志』のような詞話の専著も登場した。さらに類書の南宋・陳元靚編『事林広記』にも図譜などが記載されるようになる。

著者の張炎は南宋成立時の將軍循王張俊の六代の後裔である。俊の曾孫で張炎の曾祖父にあたる張鑑はすでに一流の文人となっていて、南宋を代表する詞人姜夔を援助した。さらに張炎の父の張枢は、周密や楊纘などの文人と風雅の宴を催している。楊纘に代表される琴曲家や周密に代表される詞人との交流の席に列なることによって、張炎は音律の知識と詞楽の実際を会得したのであろう。南宋滅亡後は詞社の指導者として生きていたと思われる。『詞源』には音律の難しさを説く部分が多く、

○詞の作品はかならず音律に諧かなっていないなければならない。しかし、音律というものは簡単に学べるものではなく、師匠から伝授してもらわなければならない、（『詞源』巻下「雜論一」。以下、訳は詞源研究会『宋代の詞論—張炎「詞源」—中国書店・二〇〇四による）

と断言する。しかしながら、張炎の詞楽に対する思いには複雑なものがあったようだ。後文では、

○音律は当然注意しなければならない所ではあるが、まず詞の語句をじっくり考えるべきである、

と、歌詞が優先されることを認めている。それは、

○今詞人たちは少しばかり音律を論じて、すぐに難しいと考えてしまう。……だから失望しあきらめて詞作から離れていつてしまうのだ、

という状況があったからであろう。歌曲である以上、音楽に注意を払わない作品はあり得ない。しかし詞が歌われず読まれるにとどまる状況は確実に進行していたのである。

三、『詞源』巻上のテキスト

『詞源』は鈔本で流通していた期間が長く、出版されたのは明代後期になってからである。しかしそれは巻下のみ、それも「音譜」「拍眼」の二条を含む音楽理論部分を完全に削除したテキストで『樂府指迷』と称するものである。したがって、上下二巻本『詞源』が公刊されるのは清代後期を待たねばならない。その間は元鈔本が転写されて読まれていたようだ。

元鈔本を鈔写したとするものには、中国国家図書館（前北京図書館）善本室所蔵の明鈔本、また静嘉堂文庫所蔵の陸心源旧蔵清乾隆三年（一七三八）朗嘯齋鈔本がある。ともに同一の元起善齋鈔本からの書写と見られ、静嘉堂文庫本のほうが丁寧に写している。また秦恩復の詞友である阮元が嘉靖年間に鈔写した『宛委別蔵』所収本も同本もしくはその転鈔本に依ったと思われる。元鈔本を写したこれら鈔本は

尊重されるべきだが、巻上の図譜に関して言えば、起善齋を含めて誰も十分には理解していなかったのではないかと思われる。

ともかくも、詞があらたな韻文様式として完全に復興した清代中期において『詞源』二巻本はようやく公刊された。嘉慶十五年（一八一〇）秦恩復輯『詞学叢書』所収『詞源』初版本がそれで、元鈔本に基づいたことは封面に「元起善齋鈔本」と記していることから知られる。この初版本を校訂して『守山閣叢書』所収本が、またそれによって『国学基本叢書』所収本が公刊された。范錫輯『范白舫所刊書』所収『詞源』は『詞学叢書』所収本及び『守山閣叢書』所収本によっている。

秦恩復は初版を刊行した後、戈載の協力を得て全面的に校訂し、道光八年（一八二八）『詞学叢書』所収『詞源』を再刊した。本訳注の底本である。戈載は詞の研究に専心した人物で、道光元年（一八二一）には詞韻書『詞林正韻』を公刊しており、またその音律研究も精確である。この再刻秦本は後に続く多くの『詞源』の祖本となった。『粵雅堂叢書』所収本及び『思賢書局所刊詞学書』所収本、『楡園叢刻』所収本はこれを底本としている。さらに中華民国の呉梅校勘本『詞源』、蔡楨『詞源疏證』もこれにつながる。

四、『詞源』巻上に関する研究書

詞楽に関する研究は、『宋史』楽志や各種の楽律論、筆記あるいは戲曲資料や宋词そのものなどにも取材して進められ、清の乾隆年間には自度曲の詞に字譜を付した姜夔の『白石道人歌曲』が公刊されて一

層進展した。その到達点は乾隆四十二年（一七七七）刊行の方成培『香研居詞塵』に見える。それから半世紀後、秦恩復が『詞源』二巻を公刊したことによって、詞楽研究はあらたな重要資料を得た。これ以後の詞話には、多くはないが『詞源』の楽律論に言及するものが散見する。しかし『詞源』巻上に関する全面的な研究はなされず、清末民初の詞壇で活躍した鄭文焯の『詞源斟律』を待たねばならない。これに続いて蔡楨が『詞源疏証』で『詞源』二巻のすべてに校訂を施し、音律に関する条（巻上と巻下「音譜」「拍眼」）には按語を付した。近年のものとしては鄭孟津・吳平山の労作『詞源解箋』がある。『詞源斟律』『詞源解箋』ともに巻上のみを対照とする。本訳注もこれら先行研究に多くの教示を受けた。

ひるがえって日本における詞楽研究はと言えば、音楽史としてのそれを除くと現在もなおほとんど進んでいない。本訳注は文字通りの訳注ではない。訳のみでは張炎の本文の述べるところを尽くし得ず、本文を敷衍し解説する形を採らざるを得なかった。それは『詞源』理解の前提となる中国の音楽理論について日本語書籍がほとんどないためにその解説から始める必要があったこと、また張炎の本文と図とが合わせ意味する点を解明しなければならなかったことからである。時には図を以て図に注釈することも敢えて行つた。これが詞学研究に一石を投じるものとなれば幸いである。